

[インテルメッツォ — 間奏曲 2]

この30年くらいの間に、状況はずいぶん変わってきているだろう。女性の乳癌に関する話である。

ドイツでの私の婦人科の先生は、いつも、「日本では乳癌にかかったり、それで亡くなる女性はとても少ない。生活習慣や食事のせいだろうね」と言っていたのだが、私は毎回のようにその見解の修正を試みた。それって、実は検査する女性たちの数が、欧米に比べると圧倒的に少ないせいだ、と。30年くらい前、日本でマンモグラフィーの検査を受ける女性の率は、20%あったかどうか。もしかするともっとずっと少なかったかもしれない。

そんなある日、アウクスブルクにいた私に、日本の友人からFAXで(!)「ある特別な依頼」があった。「乳癌の手術で片側を全摘したが、そのアフターケアが情報によるとドイツではとても進んでいるらしい、ついてはお願いが…」という内容だった。

聞くとところによると、そのころの日本では、まだ再建手術の必要性など重んじられていず、そんな話をすると、病院側からさえ「いつまでそんなイロケを持っているのか」のような反応が返ってきたという。信じられない、と現在では誰もが思うだろう。(スゴイ“セクハラ”!) 手術によって受ける、女性の精神的な苦痛など、考慮に値するものではなかったということか。また、「術後の下着」もなんだかダサくて、その説明さえもカーテンで区切られた片隅でコソコソと話されたと聞いた。(ナンデ、ナンデ…?!)

友人の病気、それによる症状、そして彼女の受けた精神的な苦しみと悲しみ、それら全部が大きな衝撃だった。遠く離れている私に相談してくるなんて、どんなに悩んだことだろう。よし、私に何かできるなら、と奮起。町には、義肢などを扱う大きな店がある。早速そこへ出かけて、探しているものを説明した。すると、あまりにも簡単に早く理解され、あつけにとられるくらい自然で“普通”の話として受け取られた。そして目が丸くなり、言葉が出ないほど驚いたことが起こった。担当の店員がガラスのショーウィンドウの上に、普通の「品物」として5, 6個並べ出したもの。それは、様々な形と大きさの、シリコンでできた「義胸」だった。そしてその店員からの問い。

「サイズは？ トップバストとアンダーバストのサイズを教えてください。」

ここまではもちろん理解したが、その次。

「形はどうしましょう？ 釣り鐘型？ おわん型？ それともほかのご希望が？」

ハア、アノ、私自身ではなく友人なので、ちょっとそこまで知りません…、が私の答え。そして、「質や柔らかさはどんなものをお望みでしょう？ ちょっと

手に取って確かめてみてください。」動揺と驚きを隠しつつ、いかにも当たり前顔をして、私はそれぞれを手を取った。だって、その情報を友人に言葉でちゃんと伝えなければならないもの！ 内心茫然としながら、お店でシリコン胸を手をしている私を、ちょっと想像してみてください！ まず、日本ではありえない状況だろう。そして、お店の人たちのあっけらかんとした対応。

何回かの FAX のやり取りの末、ある程度希望にそった「品」を彼女に届けることができたが、このドイツ人の“ドライ”で自然な雰囲気、とても気が軽くなったのと同時に、つくづく日本との差を感じてしまった。

そのころから見ると、日本でも検査や社会での受け止め方など、ずいぶんと変わってきた感がある。マンモ、という言葉が一般的に理解されるようになったし、病状についても結構大っぴらに語られるようになった。でも最近、「画期的な、痛くない乳癌の検査」と TV で話題になった方法を見た時、正直驚きを隠せなかった。というのも、ベッドにうつ伏せ状態で行えるこの「MRI を使った検査」、ドイツやオーストリアの放射線科では、もう 20 年以上前から“普通に”存在する、私も受けたことがあるものだったから…。やっぱり日本はまだまだオクレている…、との感、大です！